

コーパスを用いた do the N 型の使用の考察

指導教員：小葉哲哉准教授・今尾康裕教授

博士前期課程 2 年 篠崎秀紀

1. はじめに	3.2 検索方法
2. 先行研究	3.3 検索結果
3. do the N 構文のコーパス調査	4. N によくみられる名詞の特徴
3.1 調査手法	5. 結論・今後の課題

1. はじめに

本発表では(1)のような、本動詞 do が冠詞の the 及び名詞を目的語として伴った場合(以下「do the N」構文)の意味的考察を行う。また、名詞が動名詞(-ing 型)の際、従来の用法とは異なる振る舞いが見られる場合があることを、コーパスを用いた観察により示す。

- (1) a. Well, I know how to do the dishes. (*Big Bang Theory*, Season 12, Episode 13)
b. They're obscure, weird programs. But they do the job. (COCA)
c. Could you do the ironing first, and then do the windows if you've got time?
(スワソ 2018)
d. I'll let the picture do the talking here. (COCA)

構成は以下の通りである。2 節で先行研究を概観し、3 節でコーパスによるデータの調査方法、検索方法、検索結果を述べる。4 節では N によくみられる名詞の特徴をみる。また do the 動名詞の形でどのような名詞が見られるかを示す。5 節で結論、今後の課題を述べる。

2. 先行研究

ここでは do が動詞として使用される場合および、do the N 構文がどのような特徴を持っているのかを、従来の研究と合わせて概観したい。

Halliday & Hasan(1976)によれば、動詞としての do は、語彙的 do、広義動詞 do、代理動詞 do、代用形の do、助動詞の do の 5 つに分類できるという。以下では本動詞用法に関連する 3 つの用法をあげる。

(a) 語彙的 do (lexical *do*)

語彙的 do とは、「(何かを)行う」「(何かを)遂行する」という一般的な意味を表す用法であり、通常は具体的な行動や作業を示す他動詞として使用される。自動詞としての使用は特殊な用法。つまり語彙的 do は「行う」「する」という一般的な意味を持ちながら、何らかの対象(目的語)に対して行為を行うことを表す。

(2) He has done the job.

(3) I have work to do.

(Halliday and Hassan 1976:)

(b) 広義動詞 do (general verb *do*)

広義動詞 do とは、特定の具体的な行動や状態ではなく、より広範で抽象的な概念を表す意味を表す用法である。そのためより広い意味領域を守備範囲とすることが可能になっている。

(4) They did a dance. (Cf. They danced.)

(5) They do lunches. (Cf. They provide lunches.)

(Halliday and Hassan 1976:)

(c) 代理動詞 do (pro-verb *do*)

代理動詞は do と happen の 2 語からなる動詞の類で、明確でなく、特定化されていない作用を表す。do は行為という作用一般を、happen は事態または受容的な行為という作用一般を受け持つ。do のとる目的語は、語彙化の度合いの低い it, that, the same などの代名詞や, something, anything, nothing, what などの代理名詞(pro-noun)が担う。

(6) A: "What was she doing?"

B: "She wasn't doing anything."

(Halliday and Hassan 1976:)

中右(1998)では、「do+目的語」表現の意味について、人間は世界を<状態><過程><行為>という三つの基本状況に分節しているとし、<状態>と<過程>の対立図式において、<行為の可能な全領域を包括する一般的鋳型>としての機能があるとした。

また do the 動名詞の構造を用いて、ある程度時間がかかる行為もしくは反復される行為(例:仕事や趣味)を述べることができる(スワン 2018)。その際、動名詞の前に限定詞(the, my, some, much など)を置くのが普通である。

つまり<do+目的語>は行為として知覚される事態を最も一般的な次元で概念化し、その目的語に対し最も適切な行為をするという意味をもって、人間の認知を概念化したものといえる。

● ここまでのまとめ

do は「(ものごとを)行う」というのが基本的意味。動名詞型は生産性が高いが、その行為は仕事や趣味に限られている。

● 課題

do the N が指摘されていない例がある。したがって、COCA を用いた大規模コーパスにより実例を観察することで先行研究の分析の妥当性を検証し、その使用が拡張されていることを示す。

(問題の指摘と課題を切り分ける)

●研究課題

COCAを用いて実例を観察することで先行研究の分析の妥当性を検証し、その使用が拡張されていることを示す。

3. do the N 構文のコーパス調査

3.1 調査方法

本研究では用例を採取するコーパスとして COCA を用いた。COCA とは、Corpus of Contemporary American English の通称であり、アメリカ現代英語を検証するために作られた汎用コーパスである。spoken, fiction, popular magazines, newspapers, academic journals の5つのジャンルから形成される。コーパスデータは1990年より毎年2000万語ずつ追加されたモニターコーパスであり、10億語以上の語彙が収録されている。

3.2 検索方法

本研究では、コーパスを検索するにあたり、[vd*] the nn という検索文字列を使用して検索を行った。まず[vd*]で、do 動詞の全ての活用形を検索することができる。具体的には do, does, did, done, doing である。さらに目的語の前の冠詞は the に限定し、その後ろには普通名詞を検索することができる nn を入力した。

上記の文字列で検索した結果、46,371 件がヒットした。抽出した do the N の事例から、特に先行研究で指摘があった、do the 動名詞(V-ing)表現を抽出し、どのような動名詞が目的語名詞として生起しているかを考察した。

3.3 検索結果

まず、do the N に生起する名詞の用例を表1に挙げる。

	名詞	did	do	does	doing	done	計
1	job	296	3710	286	657	202	5151

2	<i>work</i>	310	2470	167	866	137	3950
3	<i>trick</i>	281	1368	219	55	102	2025
4	<i>things</i>	115	1253	42	466	86	1962
5	<i>math</i>	220	1378	37	166	124	1925
6	<i>president</i>	615	11	600	11		1237
7	<i>rest</i>	243	709	204	43	20	1219
8	<i>research</i>	126	383	50	148	105	812
9	<i>show</i>	116	390	28	223	16	773
10	<i>talking</i>	37	590	28	93		748
11	<i>dishes</i>	68	363	54	190	17	692
12	<i>people</i>	155	374		24		553
13	<i>thing</i>	70	305	18	108	26	527
14	<i>laundry</i>	49	207	38	107		401
15	<i>world</i>	83	82	171	36	13	385
16	<i>honors</i>	44	305		21		370
17	<i>deed</i>	83	138	18	67	59	365
18	<i>government</i>	121		238			359
19	<i>fact</i>	66		266			332
20	<i>time</i>	63	190	53	19		325
21	<i>interview</i>	89	170		66		325
22	<i>police</i>	215	97	12			324
23	<i>kind</i>	19	179		86	18	302
24	<i>media</i>	126	31	102			259
25	<i>story</i>	70	79	83	27		259
26	<i>movie</i>	58	101	29	61		249
27	<i>day</i>	142	20	13	25	41	241
28	<i>cooking</i>	36	116	36	52		240
29	<i>doctor</i>	182		45			227
30	<i>name</i>	27		191			218

表1 COCA から抽出した do the N 名詞の頻度数上位 30 件

これらの名詞は、意味的に以下のようにグループ分けできる。

以下の分類も (7) のような例文番号をつける。

- a. 仕事・タスク関連：job, work, trick, things, rest, research, homework, chores
- b. 知的活動：math, thinking, analysis, calculation, study, reading
- c. 芸術・エンターテインメント：show, interview, dance, play
- d. 日常活動：shopping, cooking, talking, walking, dishes, laundry, cleaning
- e. 専門的活動：surgery, investigation, testing, experiment
- f. 社会・政治：honors, deed, crime, bidding, voting

g. 身体・健康関連：exercise, workout, diet

いくつかの組み合わせは、慣用句として使用される。(do the trick, do the honors, do the bidding, do the math)

(7) a. I haven't noticed any sagging or denting, and it continues to do the trick. (COCA)

(たるみやへこみは見られず、引き続き役立っている.)

b. Howe was pleased to do the honors at the dedication ceremony. (COCA)

(ハウはその除幕式で光栄にも役目を果たした.)

c. Career Justice Department officials don't want to do the bidding of Trump and Sessions.

(COCA)

(キャリア司法省職員はトランプとセッションズの指示に従いたくない.)

d. Do the math and you'll see it's right. (COCA)

(計算してみれば/考えてみれば, それが正しいことがわかるでしょう)

4. N によくみられる名詞の特徴

4.1 目的語名詞の特徴

- 従来より言われている、「やらなければならないこと」として認識されている単語が多く見られた。→グループ a (work, job) など。
- trick, honors, bidding, rest, math などの名詞は、do the N 構文で使われることで、特定の意味を表す場合がある。(意味がどれほど逸脱するかは文脈、その単語に依存する。)

4.2 動名詞の特徴

以下は do the N の目的語名詞のうち、動名詞のみを抜き出したものである。特徴として、do は原型が最も多く、割合で言えば47%に上った。(36例のうち17例) また一部の名詞、talking や killing, bidding など、仕事や趣味とは言えないような名詞も見られた。

	動名詞	did	do	does	doing	done	総計
1	talking	37	590	28	93		748
2	cooking	36	116	36	52		240
3	killing	52	39	17	54	11	173
4	shopping	16	102	22	19		159
5	bidding		79	71			150
6	shooting	71	21		48		140
7	fighting	16	43		48		107
8	reading	17	38		18	30	103
9	thinking		62		16		78

10	hiring		28		45		73
11	testing	13	38		20		71
12	walking		62				62
13	writing		38	22			60
14	cleaning		37	17			54
15	morning	14	13		19		46
16	training	11	19		12		42
17	painting	16	12		12		40
18	washing		10		21		31
19	cutting	13	14				27
20	counting		12		11		23
21	asking					21	21
22	meeting	20					20
23	planning		18				18
24	bullying					15	15
25	telling					15	15
26	wedding	14					14
27	bombing	12					12
28	reporting					12	12
29	digging		12				12
30	marketing		12				12
31	buying					12	12
32	negotiating				11		11
33	editing		11				11
34	picking					10	10
35	spending					10	10
36	judging					10	10

表2 COCA から抽出した do the V-ing の動名詞の頻度数

● do の原型が最も多い理由

- do の前に助動詞や to 不定詞を伴っている →(8a,8b)
- Let 名詞 do the 動名詞の形で使用される →(8d,8e)

~~上記がコパスの観察により考えられる。~~

(8) a. Just stand there and be quiet! I'll **do the talking**. (COCA)

(黙っている。話は私に任せておけ)

b. I didn't actually **have to do the writing** myself, I could find writers. (COCA)

(自分で書く必要は無く、書き手を探せば良いと気付いた)

c. But there are times when fighters show genuine respect for each other and want to *let their fists do the talking*. (COCA)

(しかし格闘家たちは互いに真の敬意を示し、物事を話し合うことなく実力で解決しようとする場面が時にある)

d. When we get there, you *let me do the talking*. (COCA)

(そこに着いたら、話は私に任せてくれ)

4.3. do the N の出現環境の特徴

● Let 名詞 do the talking について

let の直後に来る名詞の中でもっとも多いものは me. つまり let me do the talking という形式がイディオム化していると考えられる. さらに me 以外の語としては, the, your, my, his, him, her, their が続いた.

	R1	do	R3	R4	R5	計
me	180	0	0	0	0	180
the	42	0	231	124	15	412
your	41	0	1	1	2	45
my	15	0	1	0	1	17
his	15	0	1	0	0	16
him	14	0	0	0	0	14
her	11	0	0	0	0	11
their	10	0	0	0	0	10

表3 Let 名詞 do the talking の名詞の内訳および the の頻度

5. 結論・今後の課題

従来の議論を踏まえた上で、改めてコーパスによる do the N 構文の使用を観察し、今まで言及が見られなかった名詞の出現を指摘した。また do the 動名詞型は、日常の仕事が多いという従来の指摘があったが、近年は talking, killing, bidding などの動名詞などと組み合わさって使用されることを示した。

【課題】

- ・名詞の前の限定詞の考察の範囲を広げる。
- ・なぜ名詞が動名詞型になると、意味が異なるのかを考察する。
- ・talking, killing, bidding などの動名詞が、いつ頃から使用されていたのかを観察し、なぜ意味が広がりを見せたのかを考察する。

・do の目的語である名詞が，本動詞として使われた時と，do the N 構文で使われた時では，意味にどのような違いが生じるのかの考察。
などが挙げられる。

参考文献

- 相沢佳子 (1999) 『英語基本動詞の豊かな世界—名詞との結合に見る意味の拡大』，開拓社，東京。
- Amagawa, T. (2004) *A construction grammar approach to light verbs in English*. PhD Thesis. University of Tsukuba.
- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』，開拓社，東京。
- Halliday, M. A. K., & Hasan, R. (1976). *Cohesion in English*. English Language Series, London: Longman.
- 小西友七 (編) (1980) 『英語基本動詞辞典』，研究社，東京。
- マイケル スワン・吉田正治 (訳) (2018) 『オックスフォード実例現代英語用法辞典 第4版 (Practical English Usage (Fourth Edition))』，研究社，東京。
- 中右実 (1998) 「柔軟な思考の鑄型としての <DO+目的語> 構文」，『英語青年 (Rising Generation)』 9, 506-510.
- 瀬戸賢一 (2007) 『英語多義ネットワーク辞典』，小学館，東京。
- 安井稔 (編) (1996) 『コンサイス英文法辞典』，三省堂，東京。

データソース

Davies, Mark. *The Corpus of Contemporary American English (COCA)*.

使用したコンコーダンサー

Imao, Y. (2024). CasualConc (Version 3.0.8) [Computer software]. Retrieved from <https://sites.google.com/site/casualconcj/>